

農作業×10

麦類の栽培管理

平成29年産の麦は、登熟期の高温の影響により、一部のほ場で収量・品質が低下しましたが、全体的には、ほぼ平年並みの成績でした。

麦の栽培基本技術を励行し、高品質・安定生産を目指しましょう。

排水対策

収量低下の大きな要因として排水不良による湿害が挙げられます。この対策として、サブソイラによる弾丸暗渠の実施や排水溝を設置しましょう。

出芽の安定

多湿状態の土壌を耕うんすると碎土が粗くなり、出芽・苗立ちが不安定となります。出芽・苗立ちを安定させるため、多湿状態での耕うんは避けましょう。

適期・適量は種

は種が適期より早いと凍霜害や縮萎縮病の被害を受けやすくなり、遅過ぎると生育不足となり、収量の減少や品質低下を招きます。は種量が多過ぎると倒伏の発生や短穂化を引き起こします。「さとのそら」の「は種量」は10㍗

あたり5〜7㍗を目安として、適期・適量は種に努めましょう。

適正施肥

収量・品質を確保するためには、適正な施肥を行うことが必要です。麦の種類に応じて適正量(表1)を施用しましょう。また、土壌が酸性に傾いているほ場は石灰質肥料を施用してpHを調整しましょう。地方が低いほ場は、堆肥を施用するなど、土づくりや地力増進を図りましょう。

表1 基肥施肥量 けやき化成 (14-14-14)の場合

麦の種類	品 種 名	施肥量 (kg/10a)
小 麦	さとのそら	60~70
	あやひかり	60~70
二条大麦	彩 の 星	50
六条大麦	す ず か ぜ	50

雑草防除

ほ場ごとに優占雑草や麦類の生育ステージを考慮して、は種後の土壌処理剤(表2)を確実に散布しましょう。

表2 は種後の除草剤(土壌処理剤)

農 薬 名	使用量/10a	使用時期	使用回数	適用雑草
ゴーゴーサン細粒剤F	5~6kg	は種後出芽前(雑草発生前)	1回	1年生雑草
トレファンサイド乳剤	200~300ml	は種後発芽前(雑草発生前)	2回以内	*1年生雑草
リベレーター フロアブル	60~80ml	は種後~麦3葉期(雑草発生前~イネ科雑草1葉期まで)	1回	1年生雑草
ボクサー	400~500ml	は種後~麦2葉期まで ※小麦の場合、麦4葉期まで (雑草発生前~雑草発生始期)	2回以内	1年生雑草
ムギレンジャー乳剤	300~600ml	は種後出芽前(雑草発生前)	1回	1年生雑草
ロックス	100~200g	は種後~発芽前 (雑草発生前~発生始期)	1回	1年生雑草

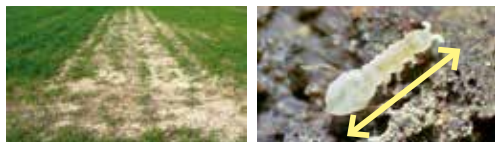
記載農薬は平成29年8月3日現在の登録状況に基づいています。

※1年生雑草(ツクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く)

ヤギシロトビムシの防除

近年、小麦の害虫であるヤギシロトビムシによる被害が散見されています。

この害虫は、夏季は地表下で幼虫態で休眠していますが、10月頃から地表に現れ、麦の幼芽、幼根を食害し、麦の発芽不良を招きます。は種時期が遅いほど被害が大きくなります。は種時期が遅いほ場は、適期の前半には種し、前年にこの害虫が発生したほ場は、は種時に薬剤防除(表3)を必ず実施しましょう。



被害ほ場の様子

体長は2~3mm

表3 ヤギシロトビムシの薬剤防除

農薬名	使用量/10a	使用量	使用方法
アドマイヤー水和剤	種子重量の0.15%	は種前	種子粉衣
パッサ粉剤30DL	種子重量の3%	//	//

記載農薬は平成29年8月3日現在の登録状況に基づいています。